

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニコス・カザンザキス『グレコへの報告』（四）：クレタとトルコの戦い、聖人伝、逃亡への切望
Author(s)	藤下, 幸子
Citation	プロピレア , 30 : 150 - 169
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055892">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055892</a>
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ニコス・カザンザキス

『グレコへの報告』(四)

クレタとトルコの戦い、  
聖人伝、逃亡への切望

藤下 幸子 訳

現代ギリシア語教室 エリニカ

クレタとトルコの戦い

学校や先生たちから学んだことよりも多く、辺りの光景から受けた最初の喜びや恐怖よりも深く、真実で類の無い動揺が私の人生に計り知れないほどの影響を与えた。それはクレタとトルコ間の戦いだった。

この戦いが無ければ、私の人生は別の道を辿っていただろうし、神はきつと違った顔をしていただろう。

私は生まれてこの方、見える、見えないに関わらず、この恐ろしい争いの空気を吸って生きてきた。キリスト教徒とトルコ人が呪いをかけるように横目で睨み合ったり、腹立たし気に口髭を捻るのを見てきた。そしてまた銃を持ったトルコ兵たちが街を何度も何度も通り、キリスト教徒たちが罵りながら門を叩けるのを見てきた。老人たちが、殺戮や勇敢な行為や戦争について、自由とギリシアについて話すのを聞いてきた。私は黙って深く考えながら生きていた。そして、これら全てにどんな意味があるのかを理解できるように、自分も準備を整えて戦えるように、大人になるのを待ち焦がれていた。

私には次第にはっきりと分かってきた。戦っているのがクレタとトルコであること、片方は解放されるために戦い、もう一方は相手の胸の上を踏みつけて、そうはさせずにいるということが。私の周りの全てのものは、もはや顔を持つようになった。私の空想において、クレタの顔とトルコの顔ができ——空想においてばかりでなく私の肉体においても——私に恐ろしい戦いを

想起させる象徴となった。

ある夏の八月十五日に、教会の聖画台の上に「生神女就寝」のアイコンが安置されていた。キリストの母は手を組んで横たわり、右側には天使が左側には悪魔が彼女の魂を手に入れようと飛び掛かっていた。天使は剣を引き抜いて悪魔の両手を関節から切り落としていて、その両手は空中にぶら下がり血が滴っていた。そのアイコンを眺めていると、私の心は喜びで膨らんでいき、こちらがクレタ、こちらの黒い悪魔がトルコ人、純白の天使はギリシア国王……と想像していた。ギリシア国王はいつの日かトルコ人の両手を切り落とすだろう。いつ？ 私が大きくなったところ……と考えて幼い私の胸は膨らんでいった。

子供の頃の私の柔らかい胸は、切望と憎悪で溢れはじめ、自身も戦闘に加わろうと、小さなこぶしを握り締めていた。戦っている両者のうちで、どちら側に私の本分があるかを理解していたので、私も祖父や父の後ろについて戦おうと、大人になるのを待ち侘びていた。

これは種であった。その種から発芽し、成長し、花を咲かせ、私の人生の木はあらゆるところに実を結んだ。私の魂を初めて揺さぶったのは恐怖でも苦痛でもなく、

喜びや遊びでもなく、自由への渴望であった。何から、誰から解放されようというのか？ 時が経つにつれ、ゆっくりと自由への石ころだらけの坂道を登っていった。まず初めにトルコから解放されるために。これが最初の一段目であった。その後、内なるトルコ——無知、敵意、嫉妬、恐怖、怠惰、人目を惹く偽りの理念——から解放されるための新しい戦いが始まった。そして最後に、虚像から、あらゆる虚像から、最も尊敬され愛されている虚像からも解放されるための戦いが。

やがて私が成長し、私の心が拡がるにつれ、戦いも拡大し、クレタそしてギリシアから溢れ出て、あらゆる時代、あらゆる場所に迸り出て、人間の歴史的背景を把握していった。もはや戦っているのはクレタとトルコではなく、「善」と「悪」、「光」と「闇」、「神」と「悪魔」であった。常に変わらぬ永遠の闘争であり、常に「善」「光」「神」の背後にはクレタがあり、「悪」「闇」「悪魔」の背後にはトルコがあった。このように、クレタが解放されるために戦っていた危機的な状況の中で、たまたまクレタ人として生まれた私は、幼い子供の頃から世界には命よりも貴重な、幸せよりも甘美な価値のあるもの、即ち「自由」が存在するのを感じていた。

ポリマンディラス二と呼ばれていた老船長がいた。その謂れは、いつも沢山マンディリを身に着けていたから。一枚は頭に、一枚は左の腋に、絹の腰帯には二枚ぶら下げ、手にも一枚持って、始終汗だくの額を拭いていた。彼は私の父の友人で、よく父の店にやって来た。若者たちが彼の周りに集まっていた、父はいつも彼にコーヒーと水ギセルを注文してやった。彼はタバコ入れを開き、刻みタバコを鼻孔に詰め込み、くしゃみをしてから話し始めた。

私は傍らに立って彼の話を聞いていた。戦争、突撃、虐殺……等の話を聞いているうちに、メガロ・カストロ三は消え失せて、私の前にはクレタの山々が聳え立ち、辺りの空気は呻き声に満ちていった。キリスト教徒たちが呻き、トルコ人たちが呻き、私の眼は銀の拳銃でピカリと輝いた。クレタとトルコが戦っていた。《自由を！》と一方が叫ぶと、《死だ！》と他方が応えていた。そして私の脳は血に満ちていった。

ある日、老船長は私の方を向き、目を細めて視線で私のことを吟味して言った。

「カラスはハトを生んだりはしない！ 分かったかい、勇敢な兄さんよ」

私は赤面した。

「はい、そんなことはありません、船長さん」と私は答えた。

「お前の父親は勇敢な男だ、お前も勇敢な男になる。望むか否かに関わらず！」

望むか否かに関わらず！ この言葉が私の心に突き刺さった。老船長の口を借りてクレタが話していたのだ。その時はこの重い言葉が理解できなかった。ずいぶん後になって、私の内に自分のものではない力、自分より優れた力が宿っていて、それが私を支配しているのだと感じた。私は度々墮落しそうになった、だが、この力が——クレタが——私にそうはさせなかった。

そして実際、自尊心によって、自分がクレタ人であるという理念によって、父への恐怖によって、子供の時からどうにか恐怖を克服してきた。初めのうちは真っ暗な夜の中庭に出て行く勇気がなかった。どの隅にも、どの植木鉢の後ろにも、井戸縁にも、小さな毛むくじやらの鬼がうずくまって待ち伏せし、目をギラギラ輝かせていた。だが、父は私に一撃を喰らわせ、中庭に放り出し、私の後ろで戸に鍵をかけた。私には未だ打ち勝つことのできていない恐怖が一つだけあった。地震が私に

与える恐怖だった。

メガロ・カストロは頻繁に根こそぎ揺れていた。辺りの地下で呻き声が聞こえていた。地球の表皮がきしみ、哀れな人間たちは仰天した。風が急に止み、木の葉は揺れず、身の毛もよだつ沈黙が世界を圧した。カストロの人たちは家や店から飛び出し、空を見つめたり、大地を見つめたりし、災いがやって来るのが聞こえるのではないかと沈黙していた。しかし心の内では怯えて考えていた。《地震が起こるんだ……》と、そして十字を切った。

ある日、パテロプロス老先生は私たちを落ち着かせるために説明してくれた。

「皆さん、地震なんて大した問題ではありません。恐れではいけません。大地の下には一頭の雄牛がいて呻いているのです。角で大地を叩くので大地が揺れるのです。昔のクレタ人たちはその雄牛をミノタウロス<sup>四</sup>と呼んでいました。大した問題ではありません」

だが、先生のこの慰めを聞いてから、私たちの恐怖は増した。それでは地震は生き物、角を持った獣で、私たちの足の下で、呻き声を上げ体を揺さぶり、人間を食べるのだ。

その時、太ったストウラテイス、堂守の息子が言った。「それでは、どうして聖ミナスはそいつを殺さないのですか？」

先生は怒った。

「馬鹿げたことを言うな！」と叫んで教壇から降りてきて黙らせようとストウラテイスの耳を捻った。

しかし、ある日のこと、私がトルコ人居住地区を大急ぎで通り過ぎようとしていた時——なぜならトルコ人が発する臭いが大嫌いだ——大地がまた揺れ動いた。戸や窓が軋んで、家が倒壊するような大きな音がした。私は恐怖のあまり狭い路地の真ん中で、口も利けずに立ち竦んだ。私は大地に目を凝らして、大地が割れ、雄牛が現れて私を食べるのを待った。その時突然、弓型の門が開き菜園が見えた。三人の若いトルコ女性が顔も覆わず、裸足で、髪の毛を振り乱して跳び出してきた。恐怖に怯え、ツバメのような細かい声を上げ、あちこちに散って行った。狭い路地には麝香の香りが漂っていた。その時以来、私の生涯ずっと、地震は違った顔を持つようになった。もはや雄牛の獰猛な顔ではなく、呻くこともなく、小鳥のようにピーピーと囀るようになり、地震と若いトルコ女性たちが一つとなった。暗

黒の力が光と繋がり、照らされるのを見るのは始めてだった。

同様に私の人生において、ある時には意図的に、また、あるときは無意識に、何度も都合の良いお面を恐怖に付けた——恋において、徳において、そして病気ににおいても——こうして私は人生に耐えることが出来た。

## 聖人伝

自由が私の最初の願望となった。二番目は神聖さへの渴望であり、それは未だに私の内に秘かに留まり、私を苛んでいる。英雄であると同時に聖人であること、それこそが人間の最上の模範である。私は子供の頃からこの手本を私の上方に、青い天空にしつかりと掲げていた。

当時、メガロ・カストロでは人の魂はそれぞれ大地に深く根を張り、天空にも深く根を張っていた。だから私は何とか文字が読めるようになった時、母に買ってもらった最初のものは一冊の聖人伝、「使徒書簡」であった。《神の視座、神の奇跡！ 天から石が降って来た：…》石が割れて、中に次のように書かれてあるのが見つけた。《水曜と金曜に油を食べ葡萄酒を飲むものは悲

しいかな！》。私は「使徒書簡」を掴み、国旗のように高く掲げ、水曜と金曜に近隣のピネロピさんの、ビクトリアさんの、そしてデリバシリレナス家のカテリナさんの戸を叩き、猛烈な勢いで家の中に突進した。台所にまっしぐらに走っていき、何の料理をしているか臭いを嗅いだ。肉や魚の臭いがしたりすると大変なことになった。「使徒書簡」を脅すように振り回して叫んだ《悲しいかな！》。怯えた近所の女たちは私を撫で、黙るように懇願した。ある日のこと、私が赤ん坊だった時には水曜にも金曜にも、おっぱいを吸っていたこと、すなわち聖なるこれらの日々には私は乳を飲んでいたことを母に尋ねて知り、私は号泣した。

私は自分の玩具を全て友達に売り、大衆向けの聖人の伝記の小冊子を買った。毎日夕暮れ時には、中庭のバジルやマリーゴールドの中で自分の腰掛に座って、聖人たちが自分の魂を救済するために耐えた、ありとあらゆる殉教の全てを大声で読み上げた。近所の女たちは針仕事や手仕事を持って集まってきた。何人かは靴下を編みながら、また何人かはクロガラシの掃除をしながら、或いはコーヒー豆を挽きながら聞いていた。聖人たちの苦悩や受難を聞いて中庭にはしだいに激しい

啜り泣きの声が広がっていった。アカシアの木に吊り下げられたカナリアは朗読と悲痛な声を聴き、うっとりとして首を伸ばし囁いていた。香草類が植わり上にはぶどう棚がある小さな菜園は閉ざされて暖かく良い香りが漂い、女たちの慟哭に包まれたエピタフィオス<sup>五</sup>を思わせた。通りがかった人たちは立ち止まり、誰か亡くなったのだらう<sup>三</sup>と思い、悪い知らせを父に告げに行った。しかし、父は首を振って「何でもないんだ。倅が近所の女たちを神の意志と教えに導こうとしているのだ<sup>四</sup>」と言ったものだ。

私の幼い空想の中では、遠くの海が広がり、船が秘かに出港し、岩山の間で修道院が輝き、ライオンが隠者に水を運んでいた。私の心はナツメヤシの木とラクダに満ち溢れていた、娼婦たちは教会に入ろうと悪戦苦闘し、炎の戦車が天に上り、砂漠は娼婦や女の笑い声が優しく、心地よく響き渡っていた、誘惑が心優しい聖バシリス<sup>六</sup>のようにやって来て、砂漠の隠者に食べ物や黄金や女たちを贈り物として持って来た。しかし隠者たちは視線を神の方にはっきりと向けていたので、誘惑は消え去っていった。

厳しく忍耐強くあれ、幸せを軽蔑し、死を恐れるな、

この世の遙か彼方にある至上の価値あるものを求めよ。ほら、このような声が大衆向けのこの冊子から絶えず立ち上って来て、子供心にも私は教えられた。と同時に、秘かな逃亡、遠くへの旅、苦難に満ちた放浪への激しい渴望をも教え込まれた。

聖人伝を読み、おとぎ話を聞き、人々のおしゃべりに耳を傾け、これら全てが私の内で変形し、歪み、けばけばしい嘘になっていった。近所の子供たちや同級生を集め、私自身の冒険として彼らに伝えた。私はたった今砂漠から戻ったばかりであり、私は一頭のライオンを持っていて、そのライオンに小さな甕を二つ積んで泉に行き水を汲んだ、などと彼らに言ったものだ。また、一昨日、家の門の前で天使を見かけたが、その天使は自分の翼から羽を一本抜いて私にくれたんだとか……。私は既にその羽を持っていて、彼らに見せた。——それは一昨日、家で白い雄鶏を絞めたが、その鶏の長い白い羽を一本抜いておいたものだったが——私は天使の羽をペンにして書くのだと言った。

「書くって？ 何を書くの？」

「聖人の伝記。爺ちゃんの伝記だよ」

「君の爺ちゃんは聖人だったの？ トルコと戦ってい

たと言つてなかつた？」

「ああ、同じことだよ」と私は言い、ペンにするために小刀で羽の先を尖らせた。

ある日、学校の国語の時間に、ある子供が井戸に落ち、黄金の教会や花咲く菜園や、お菓子やキャラメルや小銃で一杯の店がある豊かな街にいた……という話を讀んだ。私の心は燃え上がった。家に走つて帰り、中庭にカバンを投げ捨て、井戸の縁にしがみ付いた。飛び込んでは豊かな街に入ろうとして。母は中庭に面した窓際に座つて妹の髪を梳いていたが、母の視線が私を捉えた。母は大声を上げて走つて来て、私が頭を前に突き出し、脚で地面を蹴つて井戸に落ちようとしたまさにその瞬間、私の制服を掴んだ。

私は日曜日ごとに通つていた教会の聖画壁の下の方にあるイコンをよく見たものだ。キリストが白い旗を手に持つて墓から立ち上り、旗が空中に舞つていた。その下の方では番兵たちが仰向けに倒れ、怯えてキリストを見ていた。私はクレタの蜂起や戦闘について何度も聞いていた。父の父は偉大な戦士であつたとよく聞かされた。キリストを見ているうちに、次第にこの方が私の祖父であると確信するようになっていった。私は

そのイコンの前に友達を集めて言つた、「ほら、僕の爺ちゃん旗をもつて戦いに出かけるのだ。ほら、トルコ人たちが足下に仰向けに倒れている」と。

私が言つたことは真実でも嘘でもなかつた。論理や倫理の限界を乗り越えて、より軽やかで、より自由な空気の中に漂つていた。もし誰かが私が嘘を言つていると言つたとしたら、私は恥ずかしくてわつと泣き出したことだろう。私が嘘を言つた訳ではなく、私の手の中にある羽は雄鶏の羽であることを止め、天使が私に与えたものであつた。そして旗を持ったキリストが私の祖父であり、その足下の怯え切つた番兵がトルコ人たちであることを揺るぎなく信じていた。

随分後になつて、私が詩歌や小説を書き始めた時、この密かな細工を創作というのだということを理解した。ある日、「あばら家住まいの聖ヨハネ」の聖人伝を讀んでいた時、びっくりして跳び上がり、決心した。《聖徒の列に加えられるために、聖山<sup>ハ</sup>に行こう》と。振り返つて母を見ようとせす——「あばら家住まいの聖ヨハネ」もこんな風にしたのだが——玄関の敷居をまたぎ道に出た。最も人通りの少ない路地を通り港に着いた。叔父さんの誰かに見つかかり、家に連れ帰られるので



はないかと恐れて走った。出港しようとしていた最初の小船に近づいた。小麦色に日焼けした船乗りが、鉄の係船柱に身を屈め太綱を解こうと苦戦していた。心を揺り動かされ身震いした。彼に近寄って言った。

「船長さん。船に乗せて連れて行ってくれませんか？」

「どこに行きたいんだ？」

「聖山です」

「どこだって？ 聖山に？ 何をするんだ」

「聖徒の列に加えてもらうためです」

船長はわっと笑って、若鳥を追うように手のひらを叩いた。

「家だ！ 家にお帰り！」と大声で言った。

私は恥ずかしくなって家に逃げ帰り、ソファの下に潜り込み、誰にも何も打ち明けなかった。今日初めて告白する。聖人になろうとする私の最初の試みは失敗に終わった。

その悔しさは長年続いた。今も続いているのかもわからない。明らかに私は二月十八日の魂の安息日に生まれた。老いた産婆は私を両手に抱いて明るいとところに連れて行き、私をしっかりと見つめた、あたかも私の上に秘密のしるしを見ていたかのように。そして私を高

く持ち上げて言った。《覚えておいてください、この子はいつか支配者になりますよ》と。

後になってこの産婆の予言を聞いた時、私の最も密かな願望にぴたりと合っていたので彼女を信じた。その時から大きな責任が私の上のしかかり、支配者がしなかつたであろうことは、一切したいと思わなかった。さらに随分後になって支配者たちが何をしていたのかを知った時、考えを改めた。私が切望していた神聖さを実現するために、支配者たちがするようなことは何もしたいとは思わなくなった。

### 逃亡への切望

その当時、日々は単調でゆっくりと過ぎていった。人々は新聞を読まず、ラジオや電話や映画はまだ生まれていなかった。生活は音も立てず、口数少なく、粛々と流れていった。人々は、それぞれ閉ざされた一つの世界であり、どの家も、それぞれ二重に門で門を閉ざしていた。裕福な人たちはその中で日毎に老いていった。人に聞かれないように静かに楽しみ、密かに喧嘩をし、病気になることも何も言わず、死んでいった。その時には遺体を外に出すために扉が開き、一瞬、四方の壁はその秘

密を顕わにする。だが、すぐに扉は閉ざされ、生活は再び音もなく動き始める。

キリストの生誕、死、復活といった宗教的な祭日には、全ての人は良い服を着、装飾品で身を飾りたて、家を後にした。そしてあらゆる狭い路地から、教会に向かつてどつと押し寄せた。教会は扉を全開にして人々を待っていた。大燭台や吊り下げ式燭台のシャンデリアに火が灯り、家の主である馬に乗った聖ミナスは玄関口で愛するカストロの人たちを出迎えた。人々の心は解き放たれ、禍は脳裏を離れ、すべての人々は一つになった。個々人の区別は無くなり、もはや奴隸ではなく、喧嘩もトルコ人たちも死さえも存在しなくなった。教会の中にいるすべての人は、自分たちが騎士ミナス隊長を指揮官とする不死の大隊であると感じていた。

その当時、生活は深く澱んでいた。メガロ・カストロでは当時、笑うことは少なく、泣くことが多く、言葉に尽くせない悲しみは更に多かった。富裕な人たちは利己的で厳格であり、下層の人たちは従順で、金持ちが通るときは敬意を表して立ち上がった。だが、ある共通の情念が彼らを結束させていた。それが人々に心配事や欠乏を忘れさせ、すべての人々を同胞にした。だが口に

は出さなかった、というのはトルコ人を恐れていたから。

ところが、ある日のこと、静かな水が揺れ動いた。ある朝、満艦飾の小さな蒸気船が港に入って来るのが見えた。港にいたカストロの人たちは皆、ぽかんと口を開けて見ていた。港の入り口にある二つのヴェネティアの城塞の間をすべるように進んでやって来た、色とりどりの沢山の羽と旗で飾られた小船は、一体何だったのか？ あれまあ、大変！ 鳥だと言う人もいれば、仮装を着た人だという人もいる、またシンドバッドが遠くの熱帯の海で見たものの一つ、浮かぶ庭園だと言う人もいる。その時、港のカフェニオから荒々しい大きな声が聞こえてきた。「おい、ケーブさんたち、ようこそ！」。一瞬にして皆が理解し、ホッと安堵の吐息を洩らした。船はもはや近づいており、今や帽子を被り、羽を付け、華やかな色合いのケーブをまとったけばけばしい身なりの女たちが大勢乗っているのははっきりと見えた。頬はヒナゲシのように真っ赤に塗られていた。年老いたクレタの人たちは彼女たちを見ると十字を切った。「悪魔よ、退け！」と言って懐に唾を吐いた。「何をしにこんなところに？ ここは名高きカストロ

だ。こんな恥さらしは我慢できない！」

一時間後に赤いプログラムがすべての壁に貼られた。《旅芸人の一座です。男や女の役者たちがカストロの人たちを楽しませる為にやって来ました》と言っているのが知れ渡った。

その時、どうして奇跡が起こったのだろうか？ どうして父が私の手を取って、こう言ったのか？「これが一体何かを見に劇場に行こう、付いておいで」と。私にはまだ理解できなかった。もはや、すっかり暗くなっていた。父に手を引かれ港の方に向かって降りて行き、僅かな家と大きな即席会場がある私の知らない貧民街に入ってしまった。それらの即席会場の一つには明々と明かりが灯り、中ではクラリネットと小太鼓が演奏されていた。入り口には帆布が下がっていて、それを持ち上げて入るのだった。私たちも中に入った。長椅子、背無し椅子や椅子が有り、男たちや女たちは座って前のカーテンを見つめ、開くのを待っていた。海からそよ風が吹いてきて海の匂いがしていた。男たちや女たちはお喋りをしたり、笑ったり、ピーナッツやカボチャの種をポリポリ食べたりしていた。

「劇はどちらですか？」父もこのような娯楽に行くの

は初めてだったので尋ねた。カーテンを指し示してもらい私たちも座ってカーテンの上に眼を凝らした。布の上には太い大文字で《シラーの『群盗』、とても面白い演劇》と書かれてあった。その下には《何を見たとしても、心配しないでください。これは空想劇です》とあった。

「空想ってどういうこと？」と父に尋ねた。

「ほら話だよ」と父は答えた。

父には別の疑問があった。この盗賊が誰なのかを聞こうと隣の人に顔を向けたが間に合わなかった。物を叩く音が三回聞こえ、カーテンが開いた。私は目を見張った。私の前には天国が展開されていて、男や女の天使たちが行ったり来たりしていた。彼らははげげしい色の服を着て翼や黄金を身にまとい、頬を白やオレンジ色に塗っていた。彼らは大声で話していたが、私には理解できなかった。怒っていたが、なぜだか分からなかった。突然、そこに二人の大男が躍り出てきた。二人は兄弟ということだったが喧嘩を始め、互いに罵り合い、追いかかけ合い、殺し合おうとしていた。

父は耳をそばだてて聞いていたが、不満げにぶつぶつ言って、全く落ち着かない様子だった。椅子の上で体

をもぞもぞさせ、ハンカチを取り出して額から流れ始めた汗を拭っていた。だが、この背の高い男二人が兄弟で、喧嘩をしていると分かった時、父は怒って飛び上がって叫んだ。

「これは、なんていう恥さらしな茶番だ、帰ろう！」と大声で言った。

父は私の腕をひっ掴かみ、私たちは急いでいたので、二、三の椅子をひっくり返しながら立ち退いた。

父は私の肩を揺さぶって言った。

「おまえ、金輪際、劇場に足を踏み入れるのではないぞ、分かったか？ さもないとお前をイワシみたいに引き裂くぞ！」

これが私の演劇との最初の出会いであった。

生暖かい風が吹いていた。私の脳は新芽をだし、胸はアネモネに満ちていた。春は白い馬に乗った婚約者聖ヨルギスと共にやって来た。春が去り夏が来ると、生神女はこのような素晴らしい息子を生んだ彼女の恩寵が休むように、実り豊かな大地に横たわった。雨の中、赤い馬に乗った聖デIMITOウリスがやって来た。木蔭と干からびたぶどうの葉の冠を付けた秋を後ろに引き連

れて。冬が急に襲い掛かり、家では火鉢に火を入れ——父がいない時——私たち、母と妹と私はその周りに座り、残り火の中で栗やひよこ豆を焼いたものだった。そして、キリストが生まれるのを、桃色の頬をした祖父がレモンの葉に包んだ焼いた子豚を持ってやって来るのを、待っていた。私たちは冬を、黒い長靴を履き、手には焼いた子豚を持った白い髭の、祖父と瓜二つのものと想像していた。

時は流れ、私が次第に成長するにつれ、中庭のバジルやマリーゴールドは小さくなっていった。エミネの家 の階段を今や一気に登り、手を差し伸べてもらう必要はなかった。成長するにつれ、私の内では以前からの願望も大きくなり、また、それ以外の新たな願望も頭をもたげ、立ち上って来た。もはや聖人伝は私を収めきれず、私は息が詰まりそうになっていた。信じていなかった訳ではなく、信じてはいた。しかし、今や私には聖人たちがあまりにも従順に思えた。ますます深く神に頭を下げ、神に「はい」と言っていた。私の内でクレタの血が目覚めていた。私の理性ではつきりと解決した訳ではないが、本物の男とは、抵抗し、闘い、恐れず、いざという時には、神にさえ「否」と言える者であると気付

いていた。

これらすべての新しい動揺を、言葉ではつきりと明らかにすることはできなかった。だが、その当時、言葉の必要性を感じていなかった。理性や言葉の助けを借りなくても、私はしつかりと理解していた。聖人たちが胸に手を十字に当てて天国の門の外に座り、天国の扉が開くようにと叫び、懇願して待っているのを見た時、悲しみが私を支配した。それは、私たちがぶどう畑に行くたびに見かけたハンセン病を患っている人たちの思い起こさせた。その人たちの鼻は蝕まれ、指は無く、腐った唇で、城塞の門の前に座り、通行人たちの前に切断された両腕を差し出し慈悲を乞うていた。私は彼らを全く哀れに思わなかった。彼らを嫌悪し顔を背け、急いで通り過ぎた。私の子供心に、聖人たちもこの人たちのように落ちぶれ始めた。それでは、天国に入るために他の方法は無いのだろうか？ お伽話のドラゴンや王女たちのもとを去り、聖なる乞食たちとともにテーベ<sup>+</sup>の砂漠に入った。しかし、今度は彼らからも逃れなければならぬと感じた。

大きな祭日ごとに、母はお菓子を作っていた。ある時はクラビマス<sup>+</sup>、あるときはルクマス<sup>+</sup>、そして復活

祭の時は復活祭のクルーリ<sup>+</sup>を。私は晴れ着を着て、それらを挨拶としてお裾分けするために、叔父たちや叔母たちの所に持って行った。彼らは私を喜んで迎え入れ、キャラメルや写し絵を買うようにと言って銀貨を贈り物としてくれた。しかし私は、翌日ルカスさんの小さな本屋に走って行って、遠くの国々や偉大な冒険家たちについて書かれた本を買ったものだった。きつとロビンソンの種が私の内に落ち、実をつけ始めていたのだ。

これらの新しい聖人伝については、私はほんの少ししか理解できなかった、しかし、本質が私の心の奥深くに沈殿していった。私の心は開かれ、今や中世の城塞や丁子やニッキの匂いの漂う異国的な場所や神秘的な島々で満ち溢れた。赤い羽根を付けた野蛮人たちが私の内に入って来て、ひと山の薪に火をつけ、人間たちを焼き、踊り、周りの島々は幼児のように微笑んでいた。そしてこの新しい聖人たちは物乞いをしなかった。望んだものは何でも、自分たちの剣で勝ち取っていた。人は誰でもこれらの騎士たちのように馬に乗って天国に入れればいいと思う。英雄であり聖人である、これが完ぺきな人間だ、と私は考えていた。

実家は狭くなった。メガロ・カストロも狭くなった。私には今や世界は色とりどりの鳥たちや動物たち、蜜を蓄えた果実のある熱帯林のように思われ、危険に晒されて青ざめた顔をしている女性を助けるために、この熱帯林を限なく通ろうと願っていた。ある日、通りすがりのカフエニオ<sup>十四</sup>で彼女の顔を見た。ゲノベフア<sup>十五</sup>という名前だった。

今や私の空想の中で、聖人たちは、世界をあるいは聖墳墓を、あるいは一人の女性を救うために出かけた情熱的な騎士と一つになった。偉大な探検家と一つになった。スペインの小さな港から出発したコロンブスの船団も、今まで私の心の内で、砂漠に向かう聖人たちを満載して出発していた船団と同じだった——それらの帆に同じ風が吹いていた。

さらに後になってセルバンテスの英雄譚を読んだ時、私にはドン・キホーテが一人の偉大な殉教の聖人のように思われた。彼はつつましい日々の生活を越えたところ、現象の背後にある本質を見つけようと、野次と嘲笑の中を出発した。その本質とは？ 当時、私には分からなかったが、後になって理解した。本質は一つであり、常に同じであること。それにも拘らず、人間は成長する

ための他の方法を見つけていない。本質は個人を越えたある目的において、物質の撃退や個の従順である。たとえキメラ<sup>十六</sup>であったとしても。心が信じ愛する時、キメラは存在しない。ただ勇敢さと自信と実りの多い行動が存在するのみである。

歳月が流れた。私は自分自身の想像によって生じたこの混沌に秩序を与えようと努めた。しかし、この本質は私が子供だった時に、まだぼんやりとはあったが私の前に現れたように、真実の心であるといつも私には思われる。個人的な心配事を越え、快適な習慣を越えて、私たち自身よりずっと上に、私たちは目的を置く本分がある。そして昼夜分かたず、嘲笑や空腹や死に重きを置かず、その目的に到達しようとして骨を折る本分がある。いや、目的に到達するのが本分ではない。誇り高い魂は、その目的に到達するや否や、それをさらにより遠くに位置を変える。本分は目的に到達することではなく、上り坂において、決して立ち止まらないことである。そうすることによってのみ、人生は高貴さと一貫性を獲得できるのである。

このような炎の中で私は子供時代を過ごした。聖人や英雄たちのすべての冒険が、私には最も単純で最も

現実的な人間の進路のように思われた。そして、これらの炎は、当時の隷属の時代に於いて、メガロ・カストロとクレタを燃え上がらせていた別のより大きな炎と繋がった。

かつてのあの英雄的な時代にあつては、メガロ・カストロは絶え間なく怒り狂っている海の前の、クレタの浜辺に押し込められた家や店や狭い路地の雑然とした集団ではなかった。そこに住んでいた人々は、自分たちの全ての戦いをパンや子供や女への日々の心配ごとの為に浪費している男たちや女子供で構成されている指導者不在か或いは多くの指導者を持つ反乱軍兵士集団でもなかった。明文化されていない厳しい秩序が彼らを支配していた。誰も自分の頭上にある、厳しい掟に反抗しなかった。自分の上にいる誰かが命令を下していた。都市全体が要塞であつた。各人も永遠に包囲された要塞であり、メガロ・カストロの守護聖人である聖ミナスを隊長としていた。聖ミナスは葦毛の馬に乗り、赤い槍を縦に持ち、非常に小さい彼の教会のイコンに一日中動かずじつとしていた。短い巻き毛の顎髭の、日焼けした、鋭い目つきの聖人だつた。一日中、腕、脚、目や心臓などの銀の奉納品をずっしりと身に着けていた。

それらの奉納品は、カストロの人たちが彼の恩寵を受ける為に吊るし、手足などを癒してくれるように求めていた。聖ミナスはあたかも自分が絵具と板で出来た単なる絵画であるかのような振りをして動かずにいた。しかし、夜の帳が降りてキリスト教徒たちが家に集い、灯りが一つ、また一つと消えていくと、銀の奉納品と絵具をわきへ押しつけ、一蹴りして馬に拍車をかけ、ギリシア人地区の巡回に出かけた。キリスト教徒たちが閉め忘れた戸を全部閉め、夜遊びしている人たちには、もう家に戻るようにと口笛で知らせ、歌が聞こえた時には戸の前で立ち止まり、満足げに耳を傾けていた。結婚式が行われているのだろう、私の祝福を受けて子供をもうけ、キリスト教徒たちが増えるように……、と呟いた。その後、カストロを取り囲んでいた胸壁を風潰しに見て回った。その後、夜が明ける前に、一番鳥の鳴き声とともに、彼の馬に跳び乗って教会に入り、彼のイコンに上って行った。そしてまた、そ知らぬふりをしていた。だが、馬は汗をかき、口と胸は泡だらけだつた。堂守のハラランビスが朝早く掃除をし、大燭台を磨きに入つて来た時、聖ミナスの馬が汗だくなのを見たが、驚きはしなかつた。聖人が夜通し街を巡回していたことを彼

は知っていたから。全ての人が知っていた。トルコ人たちが剣を研ぎ、キリスト教徒たちに襲い掛かろうと準備をしていた時もまた、聖ミナスはカストロの人たちを護るためにアイコンから跳び出した。トルコ人たちに彼は見えなかったが、馬が嘶くのは聞こえた。彼らはその馬の声を知っていた。馬の蹄鉄が石畳の道で火花を散らすのを見、すっかり怯えて自分たちの家に潜り込んだ。

しかし、数年前にトルコ人たちは聖ミナスを目撃していた。トルコ人たちが、また虐殺しようとして準備をしていたので、聖ミナスは自分の馬に跳び乗り、トルコ人居住地区に向かって突進した。道の角から聖ミナスが急に現れた時、半ば気の狂ったムスタファ尊師は、彼を見て逃げ出し、叫び始めた。アッラー、アッラー、聖ミナスが下りてきますぞ！トルコ人たちはドアの端をわずかに開け、身を潜めて、金の甲冑をまとい、赤い槍を持った灰色の巻き毛の顎髭の聖ミナスを盗み見した。膝がガクガク震え、剣を鞘に納めた。

カストロの人たちにとって聖ミナスは単に聖人であるばかりでなく、彼らの隊長でもあった。人々は彼をミナス隊長と呼び、自分たちの武器を祝福してもらおう

と密かに彼の所に持って行った。私の父もまた彼の為に蠟燭に灯をともした。神はクレタを解放するのが遅れていることについて、私の父が自分に何と云うだろうか、どんな不満を持っているだろうかということを知っていた。

聖ミナスはキリスト教徒たちの隊長であった。残忍なキリスト教迫害者のハサンベイスは聖ミナスの隣人であり、彼の宿舎は教会にぴったりとくっ付いていた。ある夜、彼はベッドの上あたりの壁を叩く音を聞き、聖ミナスが彼を脅しているのだと理解した。という訳は、まさにその日、彼はキリスト教徒を情け容赦なくぶん殴ったので。それでミナス隊長は怒って、その時、壁を叩いたのだと。ハサンベイスも拳骨を振り上げて壁を叩き始めた。彼は聖ミナスに叫んだ。やい、お隣さん。あんたは正しい。そう、私の信仰にかけて、正しい。だが、私の壁をそんなに強く叩かないでくれ。私はあんたが落ち着くようにと、毎年あんたのカンデイリ<sup>十七</sup>の為に革袋二つの油と二十オカ<sup>十八</sup>の蠟燭を持って来るよ。我々は隣人なのだから喧嘩はよそう。その日から犬のハサンベイスは聖ミナスの祝祭日の十一月十一日に奴隷を遣って教会の中庭に革袋二つの油と二十オカの蠟



燭を降ろしていた。それで、聖ミナスが彼の壁を再び叩くことは無かった。

クレタにはある炎が存在する。言うならば、それは魂である。命よりも死よりも強い何かである。誇りと意地と勇気があり、それらと共に何か他のもの、言葉では言い表せない、計り知れないものがある。それは自分が人間であることを喜ばせもするが、同時に怯えさせもする。

私が子供だった頃、クレタの空気は獣の、トルコ人の息遣いが臭っていた。そして各人の頭の上にはトルコのヤタガン剣があった。何年も後に「嵐のトレド」<sup>十九</sup>を見た時、私が子供だった時にどんな空気を吸っていたか、クレタの上にどんな天使の流れ星が掛かっていたかを理解した。

八月は、私が子供だった頃、そして今も一番好きな月である。八月は確かにぶどうやイチジクやメロンやスイカをもたらす。私は八月を《聖八月》と名付けた。それは私の守護者であり、お祈りをしようと考えていた。何かを求める時、私は聖八月にお願いをしよう、すると聖八月はそれを神にお願いしてくれるだろうと、そし

て神は私にそれを下さるだろう。ある時、水彩絵具を買って聖八月を絵に描いたことがある。農民の私の祖父にそっくりだった。同じような赤い頬、同じような満面の笑み、だが、彼は裸足でぶどう踏み場でぶどうを踏んでいた。彼の足を膝まで、その上の太ももまでもムーストス<sup>二十</sup>で赤く染まっているように描いた。そして頭をぶどうの葉の冠で飾った。だが、何かが欠けていた。一体何だろう？ 彼をよくよく見て、ぶどうの葉の間に二つの角を描いた。というのも祖父が被っていた頭スカーフの右と左に、角のような大きな結び目を作っていたから。

聖八月を描いて顔を定着させた時から、彼に対する信頼が私の中で定着した。毎年、彼がやって来て、クレタのぶどうを収穫し、ぶどうを踏んで奇跡を起こし、ぶどうからぶどう酒を作り出すのを私は待っていた。というの、今も覚えているが、ぶどうがどのようなぶどう酒になりうるのか、というこの不可思議なことが私を苦しめていたので。聖八月のみがこのような奇跡を起こすことができるのだ。そして私は思った《ああ、私たちがメガロ・カストロの郊外に持っているぶどう畑で、ひよっこり彼に遭うことができたならなあ、そうすれ

ば彼に秘密を言ってもらおうよう尋ねるのにな！」この奇跡が何か理解できなかった。酸っぱいぶどうがぶどうになり、ぶどうがぶどう酒になり、人々はそれを飲んで酔う。どうして酔うのか？ これらすべてのことは私にはひどく不思議なことに思われた。一度父に尋ねた時、父は眉根を寄せて答えた「自分に関わりのないことに口を出すな！」

八月には、太陽がぶどうを乾燥させて干しぶどうにするように、人々はぶどう乾し棚に広げたものだ。ある年、私たちは我が家のぶどう畑に行き、郊外の小さな家に滞在した。空気は香り、大地は焼けつき、蟬も焼かれて火のついた炭の上に座っているかのようにだった。

生神女就寝祭の八月十五日には労働者たちは働かず、父もオリーブの木の根元に座ってタバコを吸っていた。近所の人たちも乾しぶどうを広げ終えて、周りに集まって来て、父の隣で黙ってたばこを吸っていた。心配げな様子だった。全員が目の一つの小さな雲に釘付けにしていた。その雲は空に突然現れ、非常に暗く、黙ってずんずん前に進んでいった。私も父のそばに座ってその雲を見つめていた。私はその雲が気に入った。暗い鉛色で毛羽立っていて、ぐんぐん大きくなっていき、顔や

体形を変えていった。ある時は満杯に膨らんだ革袋のようであり、ある時は黒い翼の猛禽のようであり、ある時は絵で見たことのある象のようであった。鼻を揺らして大地に触れようと探していた。生ぬるい風が吹き、オリーブの葉はぞつと身震いしていた。ある隣人が飛び上がって立ち、進んでいく雲に手を差し伸べ、呟いた。「畜生！ 神が私を嘘つきだと暴いてくれますように！ こいつは大洪水をもたらすぞ！」

「口を慎みなさい。生神女様が放つてはおかれませんが。今日は彼女の恵みの日です」と敬虔な老人が言った。

父はうなり声を上げたが一言も発しなかった。生神女を信心していたが、彼女が雲を支配できるとは信じていなかった。

彼らが話している間に、空はすっかり雲に覆われ、太くて暖かい最初の雫が滴り始めた。雲が低く垂れこめ、黄色い稲妻が音もなく、空をビリビリに引き裂いていた。

「生神女様、お助けください！」と隣人たちは叫んだ。

みんな驚いて飛び上がり、散らばって行った。それぞれがこの一年間の干しぶどうを広げている自分のぶどう畑に走って行った。彼らが走っている間に辺りの空

気はますます暗くなり、雲から黒いおさげ髪がぶら下がり、土砂降りの雨が激しく降ってきた。用水溝の水が満杯になり、道は川のように流れ始め、悲痛な声がそれぞれのおぼろげな煙から聞こえた。悪態をつく者もいれば、生神女に自分たちを憐れんで、手助けをしてくれるように呼び掛けている者もいた。最後には、それぞれのおぼろげな煙のオリーブの木の後ろから悲痛な慟哭が激しく起こった。

私は家をこっそり抜け出し、土砂降りの中を走った。不思議な喜びが酔いのように私を夢中にさせた。このようなむごたらしいことを発見したのは初めてのことだった。大きな禍に際して、説明のつかない非人間的な喜びが私の心を捉える。初めて火事を、叔母のカリオピさんの家が燃えているのを見た時、炎の前で飛び跳ねて踊った。誰かが私の首根っこを掴んで遠くに放り投げられるまで。また、私たちの先生のクラサキスさんが死んだとき、やつとこのことで笑いを抑えることができた。叔母の家が私の上の重荷であったかのように、私の先生が私の上の重荷であったかのように、身軽になった。火や洪水や死が私にはとても友好的な幽霊に思えた。私もそれらの家族の一員の幽霊で、悪霊たちみんな

家々から人々から大地を解放しようと戦っているかのようだった。

道路までたどり着いたが、それを超えることはできなかった。道路は川になっていて、私は立ち止まって見詰めていた。水と共に、半ば乾燥したおぼろげな塊まりになって、幾つも幾つも流れていた。一年の苦労が海に向かって流れ、消え失せていった。慟哭が強くなり、何人かの女たちは膝まで水につき、わずかな干しぶどうを救い出そうと苦闘していた。また、別の女たちは道端に突っ立って、頭スカーフを解き髪の毛を挽きむしっていた。

私は骨までずぶ濡れになり家の方に向かったが、喜びを隠すのに精一杯だった。父がどうしているかを見ようと急いでいた。泣いているのか、悪態をついているのか、それとも、叫んでいるのだろうか？ ぶどう干し場を通った時、私たちの干しぶどうが、すっかり無くなってしまっているのを見た。

父が玄関口で身動きもせず、口ひげを噛んでいるのを見た。母は父の後ろに立って泣いていた。

「お父さん、僕たちの干しぶどうは駄目になってしまったの？」と私は叫んだ。

「俺たちは駄目にはならん。黙っていなさい」と父は答えた。

私はこの瞬間を決して忘れたことはない。私の人生における困難な時期に大きな教訓になったと思う。父が冷静で、微動もせず、玄関口に立ち、悪態をつくこともなく、懇願することもなく、泣いてもいなかったのを思い出す。近所の全ての人たちの内で父一人だけが、微動だにせず、大惨事を見つめ、人間の威厳を保っていた。

【註】

・本訳は Νίκου Καζαντζάκη ΑΝΑΦΟΡΑ ΣΤΟΝ ΠΑΡΕΚΟ, 一九八二年版 Εκδόσεις Ελένης Ν. Καζαντζάκη, Αθήνα を底本とし Πάλη Κλήτης και Τουρκιάς, Συναξάρια, Αρχαία θρησκείας の各章を訳したものである。

・原著に於いては、今日では人権上不適切とされる、特定の職業、民族、疾患などへの差別的、侮辱的表現が多数見られるが、執筆時の時代背景と原著者の意図に鑑みて、翻訳文でも原文の意味合いを尊重する訳語を用いた場合がある。但し訳者に差別や偏見を助

長する意図はないことをご了承願いたい。

一 八月十五日：生神女就寝祭 (Κοίμηση της Θεοτόκου)

の日。日本ハリストス正教会ではイエス・キリストの母を生神女マリアと呼ぶが、その永眠を記念する正教会の祭日。カトリック教会の聖母被昇天の大祝日に相当。

二 ポリマンデイラス：沢山のマンデイリ（スカーフまたはハンカチ）を身に着けた人の意味。

三 メガロ・カストロ：現在のイラクリオ。

四 ミノタウロス：クレタ島のクノッソス宮殿のラビュリントス迷宮に住んでいたという、頭が牛で胴体が人間の神話上の怪物。

五 エピタフィオス：キリストが十字架上の死後、墓に埋葬されたことを記念する、復活大祭の二日前の聖金曜日の夜に行われる儀式。また捧げ持たれる棺。司祭と花で覆われた棺を先頭に、蠟燭を持った信徒の列が教区を一巡する。

六 聖バシリス（聖バシレイオス）：（三三〇頃—二七九）。

カッパドキアのカイサリアで主教で、四世紀の最も重要な神学者の一人。殉教した一月一日が祝祭日で、ギリシアではサンタクロースではなく、聖バシリス

がその日、子供たちにプレゼントを持ってくる。

**七** あばら家住まいの聖ヨハネ…五世紀前半あるいは中頃にコンスタンティノポリスに住んでいた。信仰への道を望み、両親の反対を押し切って家出し修道院に入り、修道士になった。父の世俗的な生活に対する母の嘆きを知り、三年間、息子であることを隠して実家の庭の小屋に住み両親を正しい道に導いたという。

**八** 聖山(アトス山)…ギリシア北東部、エーゲ海に突き出たハルキディキ半島にある二〇三三メートルの高山で、正教の聖地。九世紀頃から修道院が建ち始め、最盛期には四〇の修道院、三万五〇〇〇人の修道士を擁し、現在も二〇の修道院が存在する。

**九** 聖ミナス…(二一八五頃―三〇九頃)エジプトの兵士で、後にフリギアの修道士となる。ディオクレティアヌス帝の時に殉教。一九世紀にトルコ支配下のイラクリオの守護聖人となった。

**十** テーベ…エジプトのテーベ。

**十一** クラビアス…上に粉砂糖をまぶしたアーモンドと小麦粉で作られたクリスマス菓子。

**十二** ルクマス…ドーナツ風のクリスマス菓子。

**十三** クルーリ…表面にゴマのついたドーナツ型のパン。

**十四** カフェニオ…コーヒーや酒類を飲んだりゲームや雑談をしながら男たちがのんびり時を過ごすコーヒー店。

**十五** ゲノベファ…中世ヨーロッパのほとんどの国々に広まり愛された民話の主人公。無実の罪で森に追放される。現代でも文学・芸術作品に登場し親しまれている。

**十六** キメラ…頭はライオン、胴体は山羊、尾は蛇の頭の神話上の怪物。比喩的には、実現不可能な願望や空想という意味を表す。

**十七** カンディリ…教会の吊り下げ式ランプ

**十八** オカ…旧トルコの重量単位、約一キロ二〇〇グラム。

**十九** 嵐のトレド…クレタ島、イラクリオ出身の画家エル・グレコ(本名 Δομήνικος Θεοτοκόπουλος)(一五四一―一六一四)の作品。

**二十** ムーストス…醗酵前のぶどう液でぶどう酒の原料。

(協力…現代ギリシア語教室エリニカ有志)